

このような例はとくに脳底部近傍の病変の場には問題となり、病変の判読上大きなさまたげとなっている。

研究の目的は、断層シンチグラムが脳底部近辺の病変の診断にどのように役立つかを調べることである。

対照は脳底部近傍に病巣を有し、組織診断の得られたもので、腫瘍 26 例、非腫瘍 2 例である。使用した装置は大型シンチカメラ (15 $\frac{1}{4}$ インチ NaI 結晶付) に 30° 傾斜 2300 孔回転コリメータを装備したものである。断層像では陽性像の深度および拉りが 3 次元的に示され、また、正常集積像と病巣像との分離描写が多くの例で可能であった。これにより病巣か否かの鑑別に有用であり、診断精度の向上に役立つことが示された。

23. 小児における肺シンチグラムの経験例

○円尾 邦信 長瀬 勝也

(順天堂大 放)

平井 慶徳 田中 淳 倉繁 徹昭

阿部 正視

(同 小児外)

肺循環障害の診断には従来の X 線診断に加えて、肺シンチグラムがしばしば用いられ、肺血流状態の観察には優れた方法として賞用されている。我々は乳幼児においてもしばしば肺シンチグラム診断を行っているが、最近片側肺の描出が不良であった数例について血管造影等と対比し報告した。今回は肺動脈閉鎖症、総肺静脈還流異常、肺動脈閉鎖および動脈管開存、先天性肺形成不全の 4 例について報告した。先天性肺形成不全以外は胸部平面写真のみで診断を確定することは困難で、血管造影を必要とするが肺シンチグラムは乳幼児でも比較的簡単に施行できるので、肺血流量を知る目安として血管造影に先んじて施行してみるべきである。

24. Trilute, Tetralute による甲状腺機能検査

木下 文雄 前川 全 中敷領勝士

(都立大久保病院 放)

岡本 二郎 七里 泰

(同 内)

Trilute, Tetralute は $^{131}\text{I}-\text{T}_3$ レジン摂取率、血中 T_4 測定のための Kit であり、Triosorb, Tetrasorb に用いられる, resin sponge, Resomat に用いられる resin strip, Thyopac に用いられる sephadex 顆粒の代わりに sephadex G-25 の column を利用したものであり、また Tetralute は強アルカリの column 内で TBP に結合した T_4 が離れるようになっている。

Trilute 値は Triosorb 値と $r=+0.95$ とよく相関し、正常者と甲状腺機能亢進症との分離はよいが、正常者と甲状腺機能低下症との間にはかなりの重なり合いが見られた。

Tetralute 値は正常者、甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症との間のデータの重なり合いがほとんどなく、Tetrasorb, Resomat- T_4 , Thyopac-4 とそれぞれ $r=+0.95$ 前後でよく相関したが、他の T_4 測定による成績に比し、幾分低値を示す傾向が見られた。

Trilute, Tetralute 法は、方法的に簡易で、短時間で済み、使用血流量もそれぞれ 0.05 ml, 0.1 ml と少なく、臨床検査成績も優れていると思われる。

25. 副腎スキヤンの臨床評価

——副腎手術症 7 例を中心に——

○町田 豊平 三木 誠 大石 幸彦

入倉 英雄 上田 正山 木戸 晃

南 武

(慈恵医大 泌)

原発性アルドステロン症 2 例、クッシング症候群 3 例、副腎性器症候群 2 例、合計 7 例の副腎スキヤン像を手術所見と比較検討した。組織学的には、過形成 2 例、腺腫 4 例、癌 1 例である。副腎

の形態診断法としてほかに後腹膜気体撮影，副腎静脈撮影などと比較して，副腎スキャンは最も診断率が高かった(9/17)。

像の鮮明度はレ線像がはるかに優れているが，腫瘍の局在診断，腺腫と過形成の鑑別などの点で従来にない特長的検査法と思われる。